

保育構想案

奈良教育大学附属幼稚園

養護教諭・預かり保育担当 清水智佳子

1. 活動名 『夏休みもいきものといっしょに過ごそう』 満3歳児～5歳児異年齢保育 約10～15名
なかよしタイム(預かり保育) 各学年混合の異年齢で過ごす時間 夏休み

2. 子どもの姿と読み取り

- ・2023年度4月より、本園の預かり保育(名称:なかよしタイム)の利用時間が拡充した。そのことにより、朝7時30分から夕方18時30分まで園で過ごす子どもたちがいる。担任やクラスの子も達と過ごす時間の前後にさらに長く園で過ごし、また異年齢の子ども達とのかかわりの中で過ごしている。
- ・本園の園庭は広く、子どもの森も有しており、四季折々の自然の中で遊ぶことができる環境にある。
- ・なかよしタイム時には、なかよしタイムで飼っているメダカを見たり、エサをあげたりしている。卵を抱いていたメダカがいた際には、「たまご持っている!」「赤ちゃんうまれるかなあ」と毎回様子を観察する子もいた。また、時々なかよしタイムを利用する子どもが、メダカに興味をもって見ている時には、いつもなかよしタイムを利用している子どもが、「メダカのたまごあるで」「タニシもいるで」と伝える姿も見られる。
- ・1学期の初めには、サクラの幹の下の方から出ている新芽に「どうしてこんなところから生えているんだろう」と不思議そうにながめ、友だちと話したり、アリの行列をじっと眺めて「どこに行くんだろう」とアリの行く先を想像したり、ダンゴムシのオスとメスの見分け方を教え合ったりと、身近な自然を見て、感じて、伝え合う様子がみられた。
- ・園庭に生えているハーブ(ラベンダー・ミント・レモンバーベナ・ゼラニウムなど)が生えている場所を知っており、においをかいだり、水遊びに使って遊んだりしている。
- ・早朝保育時には、事務所前に巣を作っているツバメに興味を示し、巣作りやたまごを産み守る様子、赤ちゃん誕生後は親ツバメが赤ちゃんツバメにエサを運んでくる様子など、ツバメの日々を観察していた。「赤ちゃんねてるかもしれへんから静かにしよう」「そやな」などツバメを気遣い互いに小さな声で話し、「かわいいなあ」「お母さんツバメかな、お父さんツバメかな」「何人家族かな」など愛着をもちながら見守る姿がみられた。
- ・登園中に見つけた葉っぱ、セミの抜け殻などを大事そうに持ってきてくれ、色や手触りなど感じ方ことを話す子もいる。
- ・園で飼っているカメにエサをあげる際に「何が好きかな」と先生や友達と一緒に考えたり、ウサギにはと一言いながらエサを上げたり、家からキャベツやニンジンをもってきて自分の手から食べてくれる愛らしい様子に「かわいいなあ」と喜んで触れ合う姿もみられる。触りたい、なでたいけれど、怖くて、先生や友達が触っている様子を眺めている子や友達がなでているのを見て自分もなでてみようとする子もいる。

3. 目指す子どもの姿

- ・身近ないきもの存在を知る。
- ・五感を使って、感じたこと、気づいたことなどを自分なりの表現の仕方で伝える。
- ・飼育している小動物のお世話を通して、いのち(生命)を感じる。
- ・いきものや自然に関心を持ち、大切にしようとする。
- ・つかまえた(とった)いきものを飼うときは、責任をもって最後まで世話をしようとする。

4. 活動の目標(ねらい)

- 身近ないきものについて知る。(知識及び技能の基礎)
- 自分なりに、感じたり考えたたりしたことを伝えようとする。(思考力・判断力・表現力等の基礎)
- いきものについて考え、自分のできることをする。愛着をもってかかわる。(学びに向かう力・人間性等)

5. 評価規準

知識及び技能の基礎	思考力・判断力・表現力等の基礎	学びに向かう力・人間性等
① 飼っているいきもの様子を観察する。 ② 飼育の仕方や必要なお世話についてわかる。	① 観察して、不思議に思ったり、感じたりする。 ② 思ったり、感じたりしたことを自分なりの表現で、周りの友達や先生に伝えようとする。	① 触れたことのないいきものに触れようとする。 ② 飼っているいきものに興味関心をもち、飼育するために、自分ができるお世話をしようとする。

6. 環境構成

○活動内容の設定理由

・園で飼育しているカメやウサギがいることは知っているが、さわったり、お世話をしたり、身近に生活をしたりすることが少ない。夏休みの機会に、園で飼育しているいきものと一緒に過ごし、実際触ってみて、預かり保育の異年齢の友達と共に世話することを通して、園で過ごしているいきものに関心をもち、いろいろなことを感じてほしいと考えた。

○教材について(環境構成)

・園のウサギ、他のクラスで飼っているカメやカブトムシ、ザリガニなどの様子を身近に観察し、触れ合えるように、預かり保育を行う保育室のそばに集めておく。

○展開の工夫

- ・いきものたちが、何を食べているのか、どんなところで過ごすことがいいのか、など飼育している状況を見て、お世話に必要なことを一緒に考えていくようにする。
- ・具体的な問いかけや投げかけて、不思議さや疑問を考えていくようにする。
- ・知ったことで、自分ができることを考え、行動に移せる機会をとらえ、援助する。

7. ESD との関連

○活動を通して養いたい ESD の視点(見方・考え方)

- ・多様性 いろいろないきものがあることを知る。いろいろな考え方、感じ方をする友達(異年齢)がいることを知る。
- ・連携性 異年齢の友達と一緒に観察したり、協力したりしてお世話をする。
- ・責任性 飼っているいきもののお世話をする中で、いきものもよりよく生きるために自分たちができることをする。やさしさ、責任感の心で、飼っているいきものを最後まで面倒を見る。

○活動を通して主に育てたい ESD の資質能力

- ・未来像を予想して計画を立てる力 水槽の水替えに必要な水を事前に用意する。
- ・コミュニケーションを行う力 いきものについて知っていることを話す。わかりやすく伝える。
友達の話を聞く。
感じたこと、思ったことを自分なりに表現する。
- ・他者と協力する態度 異年齢の友達と共感・協力して、いきものをお世話(ケア)する。
- ・つながりを尊重する態度 園の身近ないきもののお世話を通じて、さらに周りのいきものに関心を寄せる。
- ・進んで参加する態度 恐る恐るからでもいきものを触ってみようとする。毎日、お世話をしようとする。

○ESD で育てたい価値観

自然環境、生態系の保全を重視する(生物多様性の重視)

○貢献できる SDGs

- ・4 教育
- ・15 陸の豊かさを守ろう

8. 展開 『夏休みもいきものといっしょに過ごそう』—園で飼っているいきもののお世話をしよう—

2023年7月21日～8月31日(夏休み)実施

なかよしタイム(預かり保育) 満3歳児～5歳児異年齢保育 約10～15名

予想される子どもの活動	保育者の環境構成と援助
<p>○飼っているいきもの様子を観察する</p> <p>○ウサギをなでたりエサをあげたりする。</p> <p>○保育者がカメやザリガニのために水をかえたり、ウサギのゲージを掃除したり、カブトムシのゼリーを新しいものに交換したりすることを見たり、一緒にしたりする。</p> <p>○友達がカメやザリガニ、カブトムシに触ったり、手に持ったりする様子を見て、真似てやってみようとする。</p> <p>○いきものを観察したり、触れ合ったり、お世話をしたりする中で、不思議に思ったことや感じたことを、周りの友達や先生に伝えようとする。</p> <p>○いきものに関心をもち、慈しみをもってかかわろうとする。</p> <p>○新しい水を汲んだり、えさを取り替えたり、掃除をしたり、いきものを移動させたり、自分でできるお世話をやってみようとする。</p>	<p>・園のウサギ、他のクラスで飼っているカメやカブトムシ、ザリガニなどの様子を身近に観察し、触れ合えるように、預かり保育を行う保育室のそばに集めておく。</p> <p>・いきものたちが、何を食べているのか、どんなところで過ごすことがいいのか、など飼育している状況を見て、お世話に必要なことを一緒に考えていくようにする。</p> <p>・具体的な問いかけや投げかけで、不思議さや疑問を考えていくようにする。</p> <p>・様々な思いや態度を肯定的に受け止め、多様な考えや行動をありのままに出すことができるようにする。</p> <p>・知ったことで、自分ができていることを考え、行動に移せる機会をとらえ、自らやろうとする気持ちややろうとしている姿を認めていくようにする。</p>

9. エピソード

エピソード① 「ウサギって水飲むんや！」(4歳児)

夏休みのなかよしタイムで、ウサギのるるちゃんのゲージを子どもたちが登園する場所に置き、子どもたちがるるちゃんがいることがわかり、関心が持てるようにした。

保育者がウサギのゲージの掃除をしだすと、4歳児のA児が、「これだれのウンチ？」とウサギのウンチを指さして話しかけてきた。

保育者：「誰のだと思う？」

A児：「るるちゃんの。丸いウンチやねんなあ。」

ウサギのウンチをまじまじと見ている。すると、ゲージの横につけてある、

水飲み用の容器に気づき、

A児：「なんでこんなところにペットボトルつけてあんの？」

保育者：「何に使うと思う？」

A児：「わからない」

と、言いながらウサギの様子をじっとながめ、

A児：「あっ、るるちゃんが、飲む水や！ ウサギって水のむんや！」

と、自分で気づいたことに興奮しながら話していた。

A児：「ぼくが、水入れてきてあげるわ。」

と、水の容器に水道の水を入れ、ゲージにかけ、

A児：「るるちゃん、新しい水入れてきたで、喉乾いたらのみや。」

と、ウサギに語りかけていた。



(考察)

今まで、広場に出たウサギに、えさをあげたりなでたりしたことはあるが、ウサギのゲージの掃除を子どもの目の前で実施することで、今まで意識したことがなかったウンチや飲み水のことに気づくことができたようであった。このようなことがきっかけとなり、子どもがいきものへの興味や関心を深めたり広げたりすることにつながるのではないだろうか。

ウサギが水を飲むということも、A児にとっては初めて知った事実として驚きがあり、大きな関心事となった。ウサギのために新しい水を入れることが、ウサギのために自分ができることとしてA児は考え、すぐ行動にうつしたことは、一緒に園で生活するいきものだからこそ、慈しみの気持ちをもってかかわる姿ではないだろうか。A児がウサギに語りかけている姿からも読み取ることができる。

エピソード② 「おひさまパワーの水やで」(3歳児)

カメとザリガニの水槽をのぞき込んでいた TM 児が

B 児:「なんか、水、くさいにおいがする。」

と、言ってきた。

保育者:「ほんまやなあ。なんでやろ。」

B 児:「水汚れているからやで。」

保育者:「ほんまやなあ。どうしよう。」

B 児:「きれいな水に取り換えてあげなあかんねんで。水道の水はあかんねん。バケツにくんで、おひさまのところにおいとかなあかんねん。」

と、教えてくれたので、周りにいた子どもたちと一緒にバケツを探しに行き、水道水をため、日なたに置いておいた。

昼過ぎに、バケツの水を取りに行き、子どもたちと一緒にカメとザリガニの水槽の水を取り換えることにした。すると、満3歳児クラスの C 児がバケツに手を入れ、

B 児:「あったかーい!」

と、驚いた表情で、叫んだ。すると他の子どもたちが次々にバケツに手を入れ、

子どもたち:「あつーい」

「あったかーい」

「きもちいい!」

「なんでやろう?」

と、口々に言っていると、

B 児:「そらそうやで、おひさまのパワーであつたかくなんねんで。おひさまのパワーの水やで。」

と、みんなに伝えた。満3歳児の K 児は、

C 児:「おひさまのパワー??」

と、B 児にたずねると、

B 児:「そやで。」

と、どことなく自信ありげに答えていた。

(考察)

小学生の兄がいるB児は、普段から「お兄ちゃんに教えてもらった」と、紙飛行機の折り方やバッタの名前などを周りの子どもたちに話している。この日も、水のおいが臭くなった水を新しいものに替える、水道水ではなく、日光を利用したカルキ抜きした水を使用することを知っていて、教えてくれたようであった。

満3歳児のC児が、バケツに手を入れてみたことも、純粋な好奇心の表れのような気がする。バケツをおひさまのもとに置いておいたらどうなったのか気になっていたのではないだろうか。そして、水が「あったかーい」と、自分の肌で感じることができた。その感動が、周りの子どもたちにも伝わり、好奇心を刺激し、バケツに手を入れたくなり、「あったかーい」の感動と共感が生まれたようであった。

どうしてバケツの水が温かくなっているのか不思議に思っている年下のC児やその他の周りの友達に、分かりやすい言葉で知っていることを伝えようとして、「おひさまのパワーの水やで」とB児が答えている姿がほほえましく思えた。また、B児が自信ありげに答えている表情から、自分が知っていることを伝える喜び、知っていることがその通りになってそれを友達に感動してくれたことも喜びにつながったのではないかと思う。

この日を境に、登園したら、バケツに水を汲んで日なたに置いたり、「ザリガニの水、取り替えたほうがいいんちゃう?」と気づいたりする子どもの姿がみられるようになった。

エピソード③ 「ザリガニさんチョコキってした！」(満3歳児)

なかよしタイムの登園が落ち着いたところに、カメとザリガニの水槽の水替えを一緒にやりたい子どもたちに声をかけてやることにした。

保育者と3・4歳児が、水槽からたらいに移すために、ザリガニやカメを手にもっている様子を、満3歳児のD児とE児が、背後のほうからながめていた。

保育者：「DちゃんとEちゃんもザリガニさん持ってみる？」

と、声をかけると、2人はたらいの横にしゃがむが、持つことにはまだ勇気が出ないようで、じっと見ている。水槽の掃除が終わり、新しい水にとりかえ、たらいから水槽に移し替えようとしたときに、Dが、ザリガニの背中を指でちょっと触ってみた。

保育者：「Dちゃんさわれたねえ！」

D児はちょっと誇らしげに笑って、また、ザリガニに手を伸ばした。

保育者：「背中をここをそーとつかんでみると、つかめるよ」

と、言うと、

D児「Dちゃんが、ザリガニさんもとに戻す！」

と、意を決したように言って、ザリガニをつかんで持ち上げた。

すると、ザリガニがハサミを伸ばして威嚇してきたので、びっくりしたD児は、ザリガニから手を放した。

D児：「ザリガニさんチョコキってした！」

と、表情はなんだかうれしそうに話している。

保育者：「Dちゃん、ザリガニさんつかんでもちあげられたねえ。」

チョコキってびっくりしたねえ。」

と、話すと、

D児：「ザリガニさんチョコキってしたわ〜！」

と、また繰り返して言った。



(考察)

満3歳児のD児は、普段からダンゴムシやカタツムリなど身近ないきものに関心をもって見ていた。夏休みに入り、この日は、ザリガニに関心をもって見ているが、恐る恐る見ていた。保育者がザリガニをもち上げて見せたり、上の学年の子どもが触ったりしている様子を間近で見て、自分もやってみたくて気持ち動き、自分の手で初めて触って、つかめた日となった。

ザリガニのはさみが怖くて触ろうかどうしようかと恐る恐るだったが、実際触ってつかんでみると、威嚇して伸ばしてきたはさみが、D児にとってはとてもインパクトがあり、大きく見えたかもしれない。つかめた喜びと、大きく見えたはさみに驚き、「ザリガニさんチョコキってしたわ〜！」と感激に近い表現となったようである。

この後には、カメの水槽の水を取り替えていた3歳児の様子もD児はじっくり見て、「やりたい！」と言ってカメをもち上げ、水槽に移動することもできた。「カメの背中かたいなあ。」と触ってみてこそ分かることをつぶやいていた。

次の日、D児の母親から、「昨日、『ザリガニさんつかめた!』って喜んで話していました。『チョコキってした!』って教えてくれました。」と、家でも体験したことを話していたことを教えていただいた。D児が、家庭でも話したくなるくらい大きな感動体験であったことは間違いない。

2学期には、D児が見つけたカタツムリをかたときも肌身離さず一緒に過ごす姿もみられた。D児にとって、身近ないきものと過ごすことが、あたりまえでごくごく自然な日常となっているように思えた。

エピソード④ 「ベイビー、おはよう！今日も元気？」(満3歳児)

4歳児クラスで飼っていたザリガニが、1学期中に卵を産み、赤ちゃんが出てきて、育てていた。それを夏休みは、赤ちゃんを別の水槽に移し、なかよしタイムで引き続きお世話をしていた。水を取り換えたり、細かいエサをあげたり、と毎日ザリガニの赤ちゃんを見るのを楽しみにしていた。

満3歳児のF児は、朝登園すると、真っ先にザリガニの赤ちゃんの水槽をのぞき込み、

F児:「ベイビー、おはよう！今日も元気？」

と、ザリガニの赤ちゃんに話しかけていた。その様子を見ていた、他の学年(3・4歳児)の子どもたちが、

3・4歳児:「ベイビーってなんや？」

保育者:「赤ちゃんっていう意味だよ。」

F児:「ベイビー、かわいいなあ！ベイビーちゃん」

3・4歳児:「かわいいなあ。」

「ちっちゃいなあ」

と、しばらく、愛おしげに、ザリガニの赤ちゃんをながめていた。

(考察)

満3歳児のF児が、毎朝、「ベイビー、おはよう」と、ザリガニの赤ちゃんに、親しみや愛着をもって、声をかける姿や、単に小さいいきものということではなく、「ベイビー(赤ちゃん)」という表現であったからこそ、周りの子どもたちにも愛おしさが伝わり、そこには、優しいまなざしと温かい雰囲気につつまれ、おだやかな慈しみの感情をもちながら、ザリガニの赤ちゃんと一緒に覗き込む姿になったと思う。

また、ザリガニの赤ちゃんだけを別の水槽に移し、親ザリガニとは違う細かい粒子のエサを与えたり、水槽の温度が上がりすぎないように涼しいところに移動させたりなど、ザリガニの赤ちゃんのためにしていることを、日々のお世話で感じとったこともあるかもしれない。

10. まとめ(成果と課題)

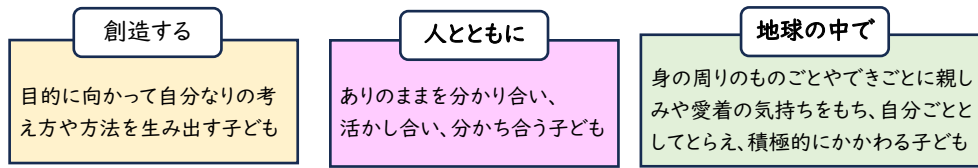
今回の実践からは、異年齢の友達と日々一緒にお世話をする中で、新たな気づきがあったり、新しいことを知ったり、共に感動したりなど、異年齢の友達の行動や言葉に刺激をうけ、好奇心が増していくようであった。また、いきものを単に大切にすることは何かを感じ取ってほしいと思って実践しているが、子どもたちが身近ないきものと一緒に過ごす中で、慈しみをもってかかわり、心動いた経験が、いのちあるものへの親しみや畏敬の念として心に残り、いきものとの向き合い方、生命の尊さを感じる基盤となっていくのではないかと感じた。

満3歳児の姿から、少しずつ動くものに対しても興味・関心を持つようになり、なまえやどのような生態かなど、まだ理解がないながらも恐る恐る触れてみようとするのだと感じた。保育者や保護者などまわりの大人の見守りの中、触れることができる世界が広がっていき、子どもたちにとって、初めて触れる体験がいきものとの関りが始まっていくのではないと思う。さらに、肌で感じる生きた直接体験を繰り返し行うことを通じて、より深い自然との関りや感受性をはぐくみ、好奇心や探求心の芽生えにもつながるのではないだろうか。

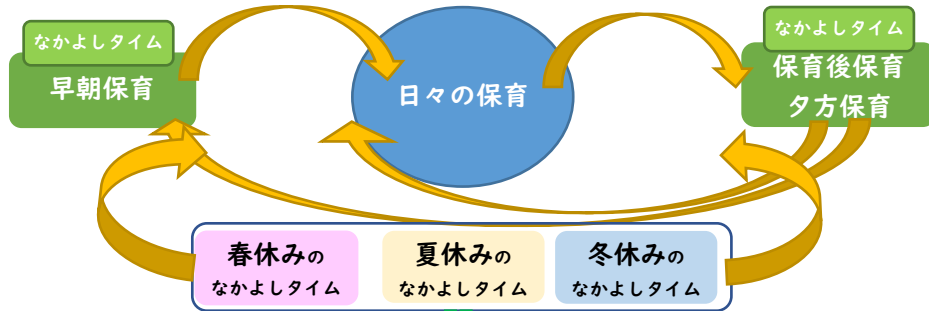
子どもたちが自然界のいきものや植物に手を伸ばしたり、じっと見ていたりする様子に、そばにいる大人も同じ目線に立ち、子どもたちが感じていることに共感し、時には「かわいい」「きれい」「おもしろい」といった言葉に表すと同時に一緒に感動を分かち合う同じ瞬間・空間にいることを大切にしていきたいと思う。

今回は、園で飼っているいきものと過ごす夏休みを取り上げた。それぞれのエピソードから、同じいきものでも、子どもの年齢や周りの人々の接し方などによって体験が大きく変わり、いきものの存在が子どもにとって様々な意味をもつものになると考えられた。今後は、年間を通して、園内外の身近な自然にも関心をもち、身近なところでどんないきもの(昆虫、植物、鳥など)が、どんなものを食べて、どんな生活をしているのか、どんな様子に変化していくのかを四季を通じて五感で感じ、自然との関わりを通して、生命を心身全体で受け止め、人間が地球の中で生きていること、生かされていることを考えられる価値観をはぐくんでいきたいと思う。

〈園の目指す子ども像〉



〈なかよしタイム(預かり保育)を利用の子ども達の毎日と1年間〉



『夏休みもいきものといっしょに過ごそう』一園で飼っているいきもののお世話をしようー【7月21日～8月31日(夏休み)】

なかよしタイム(預かり保育) 満3歳児～5歳児異年齢保育 約10～15名

知識及び技能の基礎	思考力・判断力・表現力等の基礎	学びに向かう力・人間性等
・飼っているいきもの様子を観察する。 ・飼育の仕方や必要なお世話についてわかる。	・観察して、不思議に思ったり、感じたりする。 ・思ったり、感じたりしたことを自分なりの表現で、周りの友達や先生に伝えようとする。	・触れたことのないいきものに触れようとする。 ・飼っているいきものに興味関心をもち、飼育するために、自分ができるお世話をしようとする。

ESDで重視する**能力・態度**が揺さぶられる子どもの姿(幼児期の終わりまでに育てほしい10の姿)

<p>○未来像を予測して計画を立てる力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水槽の水替えに必要な水を事前に用意する。 ・新しいえさを入れる。 <p>(自然との関わり・生命尊重/協同性)</p> <p>○コミュニケーションを行う力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いきものや飼育について知っていることを話す。 ・わかりやすく伝える。 ・友達の話を聞く。 ・感じたこと・思ったことを自分なりに表現する。 <p>(自然との関わり・生命尊重/言葉による伝え合い /豊かな感性と表現/協同性)</p>	<p>○他者と協力する態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異年齢の友達と共感・協力して、いきもののお世話(ケア)する。 <p>(自然との関わり・生命尊重/協同性)</p> <p>○つながりを尊重する態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・園の身近ないきもののお世話を通じて、さらに周りのいきものに関心を寄せる。 <p>(自然との関わり・生命尊重)</p> <p>○進んで参加する態度</p> <ul style="list-style-type: none"> ・恐る恐るからでもいきものを触ってみようとする。 ・毎日、お世話をしようとする。 <p>(自然との関わり・生命尊重・協同性)</p>
---	--

ねらい(夏休み)

- 好きな遊びをみつけて楽しむ(初めて参加の子ども)
- 好きな遊びをみつけじっくり遊ぶ中で、試したり工夫したりして遊ぶ
- いろいろな先生や他学年の友達と楽しく過ごす
- 夏の自然に興味・関心をもち、気づいたことや感じたことを自分なりの表現で伝える

なかよしタイムでの子どもの姿(1学期後半)

- ・なかよしタイムで仲良くなった異年齢の友達や先生と一緒に遊ぶことを楽しみにしている。
- ・自分の好きな遊びを選んで遊ぶ。
- ・好きな遊びをする中で、試してみようとして、工夫してみようとして遊ぶ。
- ・異年齢の友達の遊びを見たり、それをまねたりして遊ぶ。
- ・年上の子どもは、年下の子どもに優しく接したり、年下の子どもは、優しくされたりすることを喜んでいる。
- ・自分なりの表現で、思いやアイデアを伝えようとする。
- ・朝夕の空の様子や気温の違いに気づいたり、虫や植物などを見つれたり身の回りの自然に興味関心がある。